

海三十号に寄せて

井本元義

先年亡くなった、戦後無頼派詩人の織坂幸治が、ロマン派を脱して新しい文学の美を目指して立ち上げた文芸同人誌『海』第一期が、六七号まで続き、現在の『海』第二期が今号で三十号を迎える。通算すると九十七号になる。

第二期の編集長の有森は実に几帳面に責任を果たし年に二回の発行を確実にこなし、自由に発表し自由に語るという文学の書き読む喜びを主体に、同人を北海道に至るまで全国に広げた。そして号を重ねるごとに文壇の評価は増している。

私は二十四年に偶然にも福岡市文学賞の詩の分野で賞を貰った。その時の小説の部門の受賞者が有森で、初めて言葉を交わした。彼は九州大学の事務官を長く続けていた。

私は事業に専念するため二十代半ばで休筆を決心して、三十五年間ほとんどのものを書いてはいなかったが、六十歳の還暦の記念にと出した詩集が文学賞の受賞になった。だが、まだものを本気で長く続けようという決心も自信もなかった。

『季刊午前』でいくつか小説を書き、詩を『海』に発表しているうちに、年に二回の発行が目に見えると、小説を書き始める気にならざるを得なかった。『海』の初めての小説発表は十五号で長年抱えていた大杉栄の小説の第一部だった。

次の号で発表した「星と花 R 共和国奇譚」は日本ペンクラブの電子文芸館に採用された。

それからは年に二回の発行が待ち遠しかった。ランボーに関するエッセイを八回連載し（のちに単行本にした）、六回の連載の小説「静かなる奔流」も書いた。いまは「エゴイストの告白」で第七話まで続いている。これらは電子書籍の計画中である。気がついたら、九年が経っていた。

私は今年で八十歳になる。遅い文学青年である。もう発想が日ごとに狭まって、書きたいものが妄想か意味のない繰り返り言になってきたのは否めない。しかし『海』がある限り、しがみついても何らかの痕跡を残しておきたい。最後に書くのは記録の意味も含めて自伝になるだろうが、何年先になるかはまだ分からない。最近は何がきっかけで文字に親しむようになったのか、それを思いだしたりしている。

七歳のころ近所の人が何かのお祝いでお金を買ってくれた。スチープンスンの『宝島』である。少年とシルバー船長の冒険物語はハラハラしながら何度読み返した事か。続いて読んだのが『南総里見八犬伝』とアンデルセンの『即興詩人』だ。私自身はそれぞれの主人公になって異国の文化や昔の日本のロマンに生きていた。やがて、ロマンはジャン・クリストフになり、苦悩のラスコーリニコフになった。

小学校の頃、百人一首を覚え、物語を書き、旺文社の雑誌に詩、短歌、俳句を投稿し採用されては喜んでいたのが文章の始まりだ。藤村の詩を暗記して大人に褒められたりした。

中学校では文学全集の昭和詩集や近代詩集を愛読し、ほとんどの日本の詩人を知った。その頃、雑誌に取り上げられた詩を選歴記念のわが詩集にも入れた。だが次第に、ジャン・クリストフが心を占めてくるようになった。いくつか小説を書き、ほぼ十歳年上の大江健三郎がデビューした時は、自分もあと十年、と励みにもなった。

高校では、図書部に入って乱読した。ドストエフスキーやカミュに惹きつけられ、数十編の小説も書いた。そのころまだ売れていなかった作家の白石一郎に読んでもらい、てにをは、からやり直せと叱責を受けたのも懐かしい。

大学は理科系だったが、本業は適当にして小説書きは真剣だった。徹夜をして書き上げた時の満足感と自信はいまだに蘇ってくる。『檀』や『九大文学』に発表した作品を、東京が評価してくれて、就職で上京すると『新潮』の編集者と会うようになった。それから苦しい鍛錬の日々だった。仕事と遊びと物書きで毎日が一杯だったが、青春と言うより、人生に本気で取り組んだ若い日々だった。しかし、『新潮』や『三田文学』や他雑誌に何編か発表しただけで、諸事情で私は帰郷した。三島が割腹した年だった。

それからの三十五年は、自分の人生の半分になり苦しい時代だった。日々は無味乾燥でどこまでこの泥濘が続くのかと

毎夜煩悶した。ペンは鉛より重く、腕には長い棘が刺さったままで、胸の空洞を空つ風が吹き荒んだ。だが私は逃げずに乗り越えた。ただ何も書けなかった。

私の長い空白のあとの詩集に一筋の光の評価を与えてくださった、詩人の故黒田達也氏には感謝したい。一度もお会いしないままだった。そのおかげで私は『季刊午前』などに詩や小説を少しずつ書き始め、文芸思潮の「まほろば賞」を貰ったりして、書く喜びと自信を持つようになった。そして『海』に出会った。

七十歳を目の前にした私は長年の希望であったランボーやボードレールやマラルメの詩を原文で読むために、フランス語の勉強を始めた。フランス語の俳句大会でグランプリを貰い招待もされた。パリにもしばしば滞在した。書く喜びは何ものにも代え難い。そして『海』や『詩と眞實』の同人になり、それは老年人生の柱となった。今はわが作品を、小説集三冊、詩集四冊、評伝二冊の単行本として出版社の企画や自費でまとめることができた。

こうやって昔のことなどを思い出すと、歳とともにそれが妄想に膨らみ、拒否しようと思わなければ、耄碌も楽しい。無彩色の悲しい映像も、時には鮮やかな原色の渦になって、幻想の淵に私を呼び込む。私にはそれをいかに描くことができるかが残された宿題だ。貧弱な文章の切れ端を残して惨めに死んで行くのも一つの人生で宿命かもしれないが。